

シゲさんと紫電改

今日 あした

島野シゲさんは御年百歳。年齢なりに動きは緩慢だが、特別養護老人ホームの一室で機嫌よく暮らしている。とは言っても、三度の食事に食堂に行く以外は、ほとんどベッドの上にいる。今も、食堂から帰って、

「じゃあね」、隣の部屋のキヌさんと手を振り合って自室のドアを開けるなり、ベッドの上のテーブルに置いてあるリモコンを取ってテレビを点けた。

それからベッドに全身をゆだね、テレビが見やすいように角度を変え、膝も少し曲げる形でうまく治まった。

「よしよし」。シゲさんは部屋の隅のライティングテーブルに飾ってある勇一の写真に向かってピースサインをしてからあらためてテレビに目を向けた。

そこには【紫電改、最後の戦闘機】という字が太くいかめしく写っていた。

シゲさんは思わず勇一の写真の方を向いた。

「そうだね、母さん」勇一が言った。

シゲさんには本当に勇一の声が聞こえるのだ。

その日は終戦記念日とか戦争にまつわる日だったのだろう。だが、シゲさんには関係ない。毎日が休日なのだから……。

いや、そうでもない「今、テレビに映し出されている映像を実際に見たのだ、この私は」と、シゲさんは改めて考えた。

この映像は、戦後三十四年経ってから引き上げられた戦闘機で、愛媛県城辺町日土湾で、漁船が落とした碇を探すために潜った時に、見つけたもの。調査の結果、幻の戦闘機、紫電改だと分かったのだ。

紫電改は大戦中、圧倒的な強さを誇る、アメリカのグラマン F6 戦闘機に脅かされ続ける中、昭和十九年物資不足の折にも拘わらず、ゼロ戦を大幅に上回る戦闘機を……との悲願を込めて造られたのだ。勇一は、終戦間際、松山空港の三四三航空隊に所属していて、紫電改を操縦したのだ。

旧日本海軍、迎撃用戦闘機、長さ9.35メートル、重さ4トン、エンジン1990馬力、最高速度796キロ、20ミリ機銃を2基ずつ計4基備え、一人乗り。

テレビ画面では、紫電改がどんなに素晴らしかったか説明している。

シゲさんはぼんやりテレビを見ながら、赤ん坊の頃の勇一を思い返して、もう口癖になっている「勇一の父さんは、そりゃあ、良い男だったのだよ」と、心の中でつぶやいた。

シゲさんの父さん、勇一の爺ちゃんは、はるか県かなた町の漁師で、持ち船で遠洋漁業をしていた。一年の半分くらいは船に乗っている。留守を守る母さんは働き者だった。父さんが帰って来たとき以外は現金収入がないので、貯えが底をつくとき、畑で野菜を育て、収穫した野菜を調理して売り歩いて一家を支えていた。

シゲさんも母親を見て育っているので、貧乏も、働くことも平気だった。そして、父さんの船の乗組員の中で一番の好男子だった勇之介と恋に落ち、結婚をしたのだ。

とはいっても、勇一がお腹に宿ったので、あわてて祝言を上げ、勇之介はあわただしく遠洋漁業に……。父の船で船出をしたのだった。

その後はもう、運命のいたずらとしか言いようがない。
船は時化に遭い勇之介は帰らぬ人となったのだ。

シゲさんの悲しみは計り知れない程だった。それでも、月充ちて生まれた勇一は、ふにやふにやの赤ちゃん顔が日一日と、勇之介に似て来る。シゲさんにはそれが救いだった。父を知らない勇一の顔に甦る夫の顔。

だが、はつきり言ってそれは感傷だ、シゲさんにはそんなものに浸っている暇なんか無かったのだ。

父は一命をとりとめたものの、船は大破して使い物にならない。妹たち三人、それに息子の勇一の生活が年老いた両親とシゲさんの肩に覆いかぶさった。

乗り越えられたのは、我慢強く働く母と、シゲさんの根性だった。父はすっかり氣力を亡くしていたが、勇一だけは可愛くてたまらぬようだった。

「勇坊の父ちゃんはいいい男だったのだよ」と、一日に何度も言い、皆をうんざりさせていたが「いい男、いい男」と覚束ない言葉ではしやぐ勇一に、皆どこか救われてもいた。

シゲさんは早朝からの魚市場での経理の仕事に就き、午前中働き、午後は、臨時で請け負う「ヨイトマケ」の仕事もした。何しろ、必死だったのだ。

現在百歳のシゲさんにとっては、楽しい思い出だった。男たちに混じって土や砂利を運ぶ土方の仕事は、重労働でもあり、恥ずかしくもあり、誰にも話し

たくない過去の恥のはずなのに、我ながら「頑張って生きてきたのだね」と、愛おしささえ伴って思い出される。

それからシゲさんは、午前中働いていた、かなた漁港の魚市場に店を出していた島野克己と再婚をした。

彼は魚市場の中で魚屋の個人商店を出していたが、はるか県の県庁舎近くには割烹料理屋を持っていて羽振りの良い、太っ腹な男だった。

シゲさんの、切れ長の涼し気な目や、姉御肌でテキパキ動く小気味よさが気に入ったと、口説かれまくってシゲさんも再婚に踏み切ったのだった。

「勇一には淋しい思いばかりさせていたね」

シゲさんは勇一の写真を見ながら「ごめんね」と、小さく言った。

「そんなことないよ」。勇一の写真が応えてくれる。

勇一がやつと乳離れをした頃、克己と再婚をした。そんなに小さな時分からシゲさんは勇一の傍にいてやれなかった。勇一は爺、婆、それにシゲさんの三人の妹たちに、おむつを替えてもらい、食べさせてもらい、遊んでもらった。

シゲさんは一心不乱だった。克己の割烹料理屋はシゲさんの客あしらいの巧さも相まって、ますます繁盛した。

「克己さんは商売上手だったから……」シゲさんはつぶやく。

勇一の写真は真面目くさった顔をしている。

学徒出陣で出征する前に学生服姿で写真館で写したものだ。

そう、勇一は、はるか県立大学の学生だったので兵役を免除されていたのだが、第二次世界大戦の終盤、1943年（昭和18年）には、兵力不足から、文科系の大学生は学業を中断して兵役に就くことになったのだ。

親が面倒を見なくても、勇一は愛情あふれる祖父母や叔母たちの中で、真っ直ぐに育ってくれた。

「母さんのお陰でここまで生きてきました。大学まで上げて頂いたご恩は決して忘れません。お国の為に精一杯働いてまいります。母さんへのご恩返しを肝に命じて、元気に帰還してまいります。母さんどうぞお体に気を付けて私の帰りを待っていてください」

そんな挨拶をすらすらとやってのけたのをシゲさんは泣きながら半分も聞いちゃいなかったなあ、と、つくづく勇一の写真を見た。

シゲさんは、今、テレビに映し出されている、紫電改の引き揚げ作業の時、作業船に伴走する船の一隻に招待されたのだった。

引き上げられている紫電改は、昭和19年7月24日松山空港から飛び立った6機の中の1機で343空（航空隊）所属だった。どの1機かはわからない。だが、その6機の操縦士の6人の遺族はこの伴走船に招待されたのだ。

シゲさんは、テレビに映っているこの船に乗った時のことを思い出していた。

「島野くんのご遺族の方ですか？」

343空に戦時中所属していたという人に声をかけられた。

「はい、島野勇一の母親です」

「勇一君は最初、鹿児島島の鹿屋基地に配属され、特攻としてゼロ戦に搭乗したのですよ」

「……」シゲさんの全く知らないことだった。

「ところが、当時は物資不足でそのゼロ戦が上手く飛び立たなかった、そこで一命をとりとめた勇一君は、当時開発された、零戦よりもずっと馬力のある紫電改の基地である松山空港に転属になったのですよ」。

「はあ〜」、勇一は特攻隊を免れたのだ……良かった。シゲさんは思った。

「当時アメリカは2千馬力のエンジンを積んだ戦闘機を造っていたのですよ。速度も時速1000キロを超え、武装も翼に6門の機関銃を具え、その上防衛も強力なので、日本機の機関銃が当たっても、亀裂が入っても、簡単に墜落しない戦闘機だった。」

最初に日本機と戦っていたのはグラマンF6Fヘルキャットという戦闘機でして、その後は、時速7百キロを計測したというp-51ムスタング。又、『双胴の悪魔』と呼ばれたp-38など、ゼロ戦をはるかに凌駕した戦闘機にも果敢に立ち向かって行ったのです。ゼロ戦は……。

その日本軍のパイロット達は『ゼロ戦では戦えない！』と、2千馬力級の戦闘機を待ち望みました。そりゃあそうですよね。特攻隊でその身を弾丸にして突っ込んでいくのに、敵に打撃を与えられなかったら、それこそ無駄死にだ。そこで、昭和19年になって、やっと造られたのが紫電改だったので。勇一君は、そんなすぐれた部隊に転属し、戦闘機に乗るための訓練をしたのですよ」。

「はあ〜」……。

紫電改の引き揚げ作業は続いていた。

戦死した者たちの家族は、黙ってその引き揚げ作業を見つめている。

そんな中で、一人が、

「日本がゼロ戦で特攻していた時も、アメリカは『戦闘で撃墜されそうになったら、パラシュートを使って飛び降りろ』と言っていたそうだ。『海に降りても、人気のない陸上に降りてもいい、国はパラシュートで降りた人達を全力で助ける。また、戦闘区域がわかっていれば、そこにパイロットを助けるための潜水艦や高速艇を派遣する』そうも言っていたと……」。

特攻を是とした日本には、個々の人命を大切にす精神が無かったということではないか。それが悲しい！」。

そう大声で言った言葉が思い出された。

シゲさんがそんなことをあれこれ思い出してぼんやりしているうちに、テレビ画面は変わり、ザザ地区のイエスララ国による戦闘場面が映しだされた。病院の地下に銃器を持って向かう兵士達、入院中の患者がなす術もなく立往生する姿。

「世のなか、間違っている」

知らないうちにシゲさんは、テレビに向かって吠えていた。

理不尽な目にも遭って来たシゲさんの心の声だ。

「トントン」ノックの音がした。

「はい、どうぞ」

知り合いしかいない特養ホームのなかである。

「話し声がしたけど、どなたか、いらっしゃるの？」

隣の部屋のキヌさんが、なにか面白いことでもあるのではないかと尋ねてきたのだ。

「いやだー、息子と話していたのよ。お茶でも飲んでいらっしゃいよ」

シゲさんは、ベッドを起こして床に足を置き、立ち上がって、部屋の片隅に備え付けの水屋にあるポットで湯を沸かし、キヌさんと自分のコーヒーを入れて、キヌさんに来客用の椅子を勧め、自分はベッドに座り、ベッドのテーブルにコーヒーを置いて、ゆっくりと飲み始めた。

「シゲさんの息子さんは写真になっても親孝行なのね」、キヌさんが言う。

「はい、そうですよ。話しかけると相づちを打ってくれますよ」

「それは親孝行なこと、私の息子なんか、近所に住んでいるのだけど、私がこの特養にはいったものだから、すっかり安心して顔も見せやしないのよ」
「逢えるだけでも良いじゃありませんか」、シゲさんはそう言いながらも、勇一のことを思う。

勇一は戦死してしまったけど、いまだに遺族年金でこの母親を支えてくれている。いまだに親孝行をしてきているのだ。ありがとう。

完（4，400字）

参考資料

海運局地戦闘機（本土上空を死守せよ！） 野原茂 著

テレビ

NHK特集番組

『紫電改 最後の戦闘機』（知られざる戦闘機）